

第12回「超高齢化社会問題研究会」

日時：平成20年10月6日（月）14：00～

場所：超高齢化社会問題研究会

報告：「見守りネットワークの時代」

A 第12回の「超高齢化社会問題研究会」を、ただいまから開会いたしたいと思います。

「見守りネットワークの時代」というテーマでございますけれども、現場の知識とご努力、ご経験を織り込んでいろいろお話をちょうだいして、また一同で討論をいたしたいと存じます。

では、よろしく願いいたします。

**講師** お招きいただきまして、大変光栄で、恐縮しております。諸先生、ご専門にご研究を重ねられてきた方々にお話しするというのは、本当に大変なことで、できれば逃げ出したいような気分です。私どもは、大学や研究機関の研究者として、長い間、一つのテーマを追うというようなことができません。毎日、雑用の中で一つずつ関心のあることに当たっているという、その日暮らしを続けておりますので、なかなかまとまったお話にならないような気がするのですが、お話ししてみようと思います。

（スライド1ページ上段）タイトルを「見守りネットワークの時代」とつけてみました。少子・高齢社会の深化とともに、いろいろなところでいろいろな見守りシステムをやっているという程度のことですが、いま表紙の写真に出ましたのが、長岡市の端っこ、小千谷市との境のあたりにある法末という集落です。地元の方は「ほっせ」というふうに発音される、小さな集落です。

43軒しかない集落の、1月の「賽（さい）の神」のお祭りで、後ろ側に立っているのがどんど焼きにする神様です。手前側が集落の方です。集落の女の方はみんなご馳走なんかをつくったりするので、ここに写っている女性陣は支援チームがほとんどです。集落の方と一緒に写した写真で、たぶん2006年のお正

月だと思えます。あとのお話で、この地域のお話もちよっとさせていただこうと思っていますが、いま、いろいろと交流を続けているところです。

(スライド1ページ下段)レジュメをつくってみました。会社が何をしているのかということをお初めにご説明させていただいて、高齢社会について、私たちが初めの頃かかわったことや、途中で見直したりしたことについてお話しします。それから、私は建築の出身ですので、「どこに住んでいるか」「どういうところに住みたいと思っているのか」ということに興味があります。高齢者がお一人で住むようになると、当然、いろいろな意味でサービスが要るわけですが、家族が担っていたサービスがいまどういうふうになっているのかということに触れながら、いま、「地域の力」というのが非常に期待されて、それを何とかしなければいけないという風潮になっている。それをつくり上げていこうとして、さまざまな見守りのネットワークがいろいろな地域で工夫されてきている。これが完成型だとか、とても良いとかいうのが、まだなかなかないのですが、幾つかの例をご紹介します。

終わりに、先ほどの法末、これも超高齢集落ですので、そこでの話もさせていただきます。

(スライド2ページ下段)1994年に、「ぎょうせい」という出版社をご存じだと思いますが、そこで『快適環境社会の形成』というすごく厚い本の1章分だけ私が担当しました。それは「高齢社会と地域づくり」という第5章なのですが、「快適環境社会」という題がついているので、高齢社会の環境整備のあり方を検討したつもりでいるのですが、1994年頃、高齢化率が7%から14%になる頃で、高齢化社会が高齢社会というふうに移行しつつあったときだと思います。

これを書きながら考えて主張しようと思ったことは、2つほどあります。

一つは、「長寿」は本来、人間のずっと憧れてきたもの、夢と言ってもいいほどのものだったのに、いま、何だか非常に暗いイメージにとらえられていて、それはどうしてなんだろう。誰もこの長寿社会を楽しめるはずなのだから、環境整備の面からも手を打って、それが可能になるようにしなければいけないと

いうことを主張しようと思ったわけです。

もう一つは、日本の高齢化の特徴として、その頃盛んに言われていたことがあります。私のオリジナルではないのですが、3つ特徴があるとよく言われました。1つはスピードの速さであり、もう1つは著しい地域差があることであり、もう1つは、後期高齢者 最近また、後期高齢者というのは舛添さんの発言と一緒に脚光を浴びていますが が増えていくと、その3つが盛んに言われていた時代だと思います。

ただし、そのときに、だから、なるべくそれに急いで対応しなくてはいけないという論調で言われていたと思います。「対応しなくてはいけない」というのは当然ですが、私が言いたいことはもうちょっと別にあって、たとえば、すごく速いスピードで高齢化が進む。これは皆様にお話しするまでもないことですが、パーセンテージが7から14に移行する年数が、日本は24年なのに、フランスは115年。ドイツでさえ40年。スウェーデンが85年。イギリスが47年というふうに、見にくいですが、横の年数をとってみると、そのぐらい差がある。日本はたった24年で7%から14%、高齢化社会から高齢社会になったというふうにスピードの速さが言われている。

左側が欧米と比べていて、右側がアジアの中の日本のポジションですが、欧米ばかりでなく、アジアの国々と比べても日本の高齢化のスピードは際立っていて、アジアで日本を抜きそうなのは韓国。ヨーロッパ側で日本と何とか絡んでいるのがイタリアでしょうか。とにかく日本は際立っている。

スピードの速さということでは、環境整備についての技術や経験というのが社会的に共有されない。蓄積されないで、個別の努力に委ねられる。そうであれば、あっちでやったからこっちもやろうというふうに、どんどん進んでいってしまって、改良したり、本当にいいものかどうかというのがチェックできないままに進行してしまう。試行錯誤しつつ、改善するゆとりがないままに行ってしまう。

これはしようがないにしても、だからこそ一つひとつの試みは大切に熟慮してやらなければいけないんだ、ということをも主張したいと思いました。当時、

シルバーハウジングとか、公的な高齢者の住宅支援という仕事を、私は会社でたくさんやっておりました。本当に制度に乗ってできればいいというふうにやるしかないぐらいの量で、次から次へと世の中に出てくる。公営住宅なんだからとか、そういうことが言い訳になっていて、一つずつゆっくり、「ここではこういうことをしよう」とか、そういうふうな試みもできないということは大変ストレスになりました。

(スライド) 県別の高齢化を見ると、ものすごい差がある。例えばこの本に使った1990年のデータで見ますと、高齢化第1位の島根県が17.4%、一番下の47位が埼玉県の8.1%。都道府県の中で倍以上の開きがある。

このくらい大きな地域差があって、それは、高度経済成長時代に都市に人を送り出した県と受け入れた県というのでかなり違う、というのがこのときにはわかっていただけです。送り出した農村側のほうの問題は既にその時点で明らかだったのですが、受け入れた地域は、そのあとでダラッと高齢化が進んでくるといえるということも予測されていました。

だからこそひとしなみの政策ではなくて、地域の実情を踏まえたきめ細かなものをつくっていかねばいけない、というふうに言いたいと思いました。

(スライド) これも大変汚くて申し訳ありません。後期高齢者の増加ということで、1995年の実績値で言うと、後期高齢者は5.7%です。95年以降、この本が出てしばらく後ぐらいから急速に増加する傾向が見えていました。

後期高齢者が増えてきますと、当然、病気の発生率なども上がってきますし、介護の手もどんどん必要になる。そういう意味で高齢社会の快適環境というのは、これからは高齢者自身の問題だけでなく、介護する人の快適性もやはり一生懸命考えて環境整備をしていかなければいけないのではないかと。当時、「まちの点検」というようなことを、私は建築士会などで盛んにやりまして、まち歩きをして、歩きやすいとか、どういうところにハードルがあるとか、そういうことをやりながら、その成果を受けとめる仕組みがほしいなあと盛んに思いました。そうすれば介護する人たちにとっても、車椅子を押したり、いろいろなものを配達するのも非常にやりやすくなるのではないかと。

それから、そういうまちづくりにかかわる組織や事業をする人たちの協力体制がないと、バリアフリーで行けた最後のところで、突然ブツッとそれが切れてしまう。つながっていかないということもあるので、協力体制をつくることも大事だと思いましたが、地域の特性を踏まえて制度化することが必要ではないか。

こういうようなことを、その本の第5章の中で主張してきたつもりです。

(スライド3ページ上段)それから15年といいますが、20年といいますが、先ほど言った特徴がどうなったかなあというのを、このお話をいただいてから、なるべく似たものを見てみようと思って見つけてみました。

高齢化のスピードということに関しては、本当に類を見ないスピードで進んできましたし、いま、5人に1人(20%)が高齢者という本格的な高齢社会になったわけです。団塊の世代というのは昭和22年~24年に生まれた人で、生まれたときは806万人ぐらいいたそうですが、平成18年には700万弱。この人たちが65歳になるのが平成24年とか26年ですが、このあたりになってくると、3,000万人を超える高齢者が一挙に増えてきて、高齢化率は4人に1人、3人に1人というふうにどんどん上がってくる。非常に速いスピードで進んでくる。予想どおりといえば予想どおりなのですが、そういう感じになるかと思います。

(スライド3ページ下段)これは先ほどの地域差のグラフで、入れかわりというほどではないのですが、あの本のときの1990年のデータから見ますと、かなり様相は変わってきて、全国の高齢化が進んだことがわかります。2007年で見ますと、高齢化率が20%を切っているのは47のうち7つしかない。沖縄、埼玉、神奈川、愛知、滋賀、千葉、東京、これしかなくて、首都圏がやはり若い、という言い方は変かもしれませんが、20%を切っていて、ほかはすべて20%台になっている。島根県は、2007年で見ると28.2ぐらい。秋田、高知、山形など、かなり全国的に進行していくというのがわかります。それから首都4県、埼玉や千葉が、やがて、団塊の世代の高齢化とともに高齢化率がかなり上がってくるということがわかります。

(スライド)これは、県別ではなくて市区町村別に見てみると これもすご

く見づらいのですが、1980年、85年、90年、95年、2000年と、5年ごとに市町村の分布をグラフ化しています。

左側の1980年が一番高い点で、10%～15%未満のあたりが一番多いのですが、かなりギュッと詰まって高いところにあったものが、どんどん山が下がり平べったくなってくるというのがわかります。何となくズルッとベターツとなってきて、分散してきているというのがわかります。

だから、市区町村レベルでは高齢化率は分散していて、最初に出てきた法末という集落などは高齢化率68%ぐらいですから、細かく見れば、確かに地域による差は大きい。ただ、都道府県レベルで見ると、ほとんど全部高齢化している。あまり差がなくなったように見える、という感じになるかと思います。

(スライド4ページ上段)これは、9月15日の毎日新聞のトップ記事です。この日のほかの新聞を見ますと、トップは全部、リーマン・ブラザーズ倒産なんですけれども(笑)、毎日だけは、敬老の日に敬意を表してこの記事がトップになっています。

後期高齢者が増えてくることをちゃんと扱っていて、予想を前倒しになるぐらいの速さで後期高齢者が増えていて、10%を超えている。その上、1人暮らしの高齢者の増加が目立っていると。もう少し記事自体は長いのですが、そういうふう書いてあって、指摘は正しいような気がします。

そして、こういう人たちが健康を害していくとすると、施設はパンクして、公的制度の中だけではとてもやれなくなるということが書いてあります。

(スライド)ちょっと視点を変えて、高齢者がどこに住んでいるのかということで、これは、国立保健医療科学院施設科学部主任研究官・井上由起子先生のお書きになったものをコピーさせていただいたのですが、根拠がなかなか難しく、先生が計算なさったんですね。厚労省系の「社会福祉施設等調査」とか国交省のホームページで、福祉系は厚労省系、住宅に関しては国交省系のデータをいちいち積み重ねて計算なさったので、何の根拠でどこにというふうに言えないのですが、自宅にいる人を除いて何らかの介護が必要な高齢者の居住の場というのは、こんなにもいろいろ分かれている。2006年6月の段階で、こ

んなふうにいっぱい、いろいろなところに住んでいるということをおっしゃっています。介護療養型とか、老健とか、特養とか、左側の3つの典型的な施設にいる人たちは64%で、あとの人たちはかなり分散している。そういうことを言っていられっしゃいます。

(スライド4ページ下段)では、こういうところに住んでいるとして、「どこに住みたいと思っているのか」ということを見ます。これは、自分の体が弱くなったときにどこに住みたいかというふうな聞き方をしているのですが、「そのまま自宅に住みたい」というのが一番多くて、40%ぐらい。改造して何とか住もうとか、公的な施設に入居するとか。子供の家に行くというのはかなり少なくなりましたが、介護を受けられる民間の施設に入ろうというのもやはり少ない。そういう感じになっています。

(スライド5ページ上段)データばかりで恐縮ですが、「高齢者の心配ごと」を調べています。自分の健康のことがすごく心配。それから、配偶者の健康というのもやはり同じことです。介護の手はどうしようというふうに考えていられっしゃるといのが、わかります。

(スライド5ページ下段)これは、介護されている方から見て、誰が介護をしているか、続柄を調べたものです。2001年から2004年にかけて、同居している人が介護しているというのはグッと減っていますし、別居した家族、嫁に行った娘が戻ってきてというようなのは、ちょっとだけ増えているように見えますが、全体として、同居家族が見るといのは減ってきているのがわかります。

事業者というものが右から3番目くらいにあります。9.3%から13.6%に増えている。事業者に頼む人も出てきているといのがわかります。

(スライド6ページ上段)これは、誰に介護してもらいたいかという、望みのほうを聞いていて、これも95年から2003年にかけて「家族だけ」といのはグッと減っています。「家族中心+外部利用」といのはほとんど同じで推移していますが、「外部利用中心+家族」まで足すと、かなり増えている。外部を使おうといのが、結構、出てきた。介護の社会化を望む人が多くなっているといのもわかります。

グラフとして出していないのですが、高齢者の医療・介護は誰の責任か。個人や家族の問題なのか、国や地方自治体なのか、ということ聞いた設問もありまして、国や自治体で責任を持つべきだ、つまり社会全体で支えることが望ましいと思う人は、6割近くになっていて、「介護の社会化」という意識がかなり浸透してきているのがわかります。

(スライド) 認知症の高齢者のためのグループホームというのもどんどん増えてきて、いろいろな経営主体がやっているということになります。

(スライド6ページ下段) いままでお話した、データを背景にして、「地域力」というのが期待されているのではないか。一方、このグラフで見ると、「コミュニティの力はもはや期待できないか？」という感じになっています。真ん中辺で上下に分かれていて、大都市の話と町村の話とあって、75年、86年、97年、2004年と4つの年度で、「付き合いはどうか」という聞き方をすると、ガーンと減っている。それは大都市も町村部も同じで、大都市だけではない。町村でもどんどん付き合いは減っているという話だと思います。

(スライド7ページ上段) これは、同じデータを自営業者と雇用者と分けて年度を追って見えています。やはりこれも、サラリーマンだけが付き合いが減っているわけではなくて、自営業種のほうもどんどん付き合わなくなっていっている、というような感じに受け取れるデータではあります。

都市も農村も変わらないし、雇用者も事業者も変わらない。そういう意味で高齢者を支える地域力というのはどこに期待できるのかというのは、非常に暗いイメージにとれなくもない話であります。

(スライド・清水建設ホームページ) そういう中で、高齢者の「孤独死」という言葉が出てくるようになりました。地域の力が衰退してきたとともに、たった独りで死ぬ人がかなり出てきて、問題になってきた。

孤独死という言葉を探してみますと、1980年頃からちらちら見るようになったなあというふうに思っていました。多摩大学の中庭(光彦)先生のお話によりますと、朝日新聞を中心に、「また東京の孤独死」とか、孤独死が1カ月後に杉並の都営住宅で発見されたとかというのが、1970年にも幾つか見られると

いうふうに書いていらっしゃる。

しかし、私の知る範囲では、一挙に社会問題化したのは、1995年の阪神・淡路大震災の後だったと思います。それは、仮設住宅で孤独死するということが表面化してきて、これは神戸大の、後に消防研究所の理事長さんなどになりました、室崎（益輝）先生のお話にたくさん出てきます。仮設住宅から復興公営住宅に移る、そういう中での孤独死が非常に問題になってきたということを説明していらして、高齢者の場合は男性のほうが目立つし、孤立化して衰弱化して支援がない「無援化」と言ってらっしゃいますけれども、そういうところが孤独死になってくる。

仮設住宅というのは、阪神・淡路の場合は、高齢者を優先して、地域に関係なくどんどん入れました。それから神戸は大都市ですので、かなり遠くのほうに建てなければいけなくて、自分が住んでいた地域から離れたところに住まなければならなかったという意味で、一回コミュニティが破壊されている。仮設住宅でせっかく仲良くなっても、復興公営に入るときに、公営住宅法の抽選とか公平性とかいう「たてまえ」の中で、もう一回離れ離れになるという二度の破壊を受ける。これは何とかしなければいけないのではないかと、防災系の方々を中心に言われてきました。

（スライド7ページ下段）これは毎日新聞の9月20日のもので、世帯総数に占める1人世帯が非常に多くなっている。それは今後、首都圏で急に増えるだろう。埼玉の場合は2000年に1.6%だったのが、2025年には7.7%になるという警鐘を鳴らしているものです。5.61倍というのはそういうことです。

阪神・淡路の場合もそうですけれども、1人世帯というのは全国で増えてくる。そこでの孤独死というのは起きてくるのではないかと。

（スライド）これは、室崎先生の文の中にあった1人暮らしの人の率です。上が女性で下が男性だと思います。率と数で、1人暮らし高齢者というのは激増してくるということを言っています。

（スライド8ページ上段）これは復興公営の中の孤独死で、やはり室崎先生の統計です。2000年1月から2003年11月までに孤独死総数が600幾つかあって、

そのうち75%が60歳以上だと言っています。やはり男性のほうが圧倒的に多く亡くなっていて、女性のほうが少ない。発見されるまでの日数も、1カ月以内というのが半数ぐらいあるのですが、8日以上そのままだったというケースも2割ぐらいはある。1人暮らしの高齢者が激増するのも孤独死の大きな原因になるわけで、阪神・淡路をきっかけに神戸市ではさまざまな取り組みをやったように書かれています。

(スライド) 震災以降、安否確認をして、閉じこもりを防止して、緊急対応してコミュニティづくりをするということから、神戸市は非常に力を入れました。民生委員、生活支援員、高齢者世帯支援員、そういう名前の方々を仮設住宅に配置して、盛んにいろいろなことをしたのですが、行政だけでやってはダメだということがやはり確認されて、そのあとは、復興住宅以外にもどんどんこういうことを展開して、見守りサポーターというのを増やし、推進員というのも増やしたりしています。

それから、ガスメーターに遠隔のITを利用して、検針と一緒にシステムを操作できるようなものを入れたり、モデル事業をITを利用してやったり、盛んにやってきています。被災から13年くらいたったわけですが、復興住宅でも高齢化がもちろん進行していますし、高齢化率が40%を超す団地もたくさん出てきて、今後の住民相互の地域見守りの体制を、恒久的につくっていくことが大きな課題になっていると言われています。

(スライド) この図はあまりよくわからない図ですが、神戸市の垂水区でITを活用した見守りを、先ほど言いました平成15年の市のモデル事業の中でやっています。熱感知センサーを使って、トイレとか居室とか、必ず高齢の方が通る場所に設置して、人の動きを認識した記録をメールで定期的に支援者に送るとか、そういうことをやっていると言っています。社会福祉協議会の方が書いています。

(スライド) これは、やはり兵庫県ですが、但馬地方の旧和田山町です。人的ネットワークで、もともと富山県の宇奈月というところで、新聞販売員とか、郵便局の配達の人とか、牛乳屋さんとか、そういう人たちの協力で孤独死防止に取り組んだという、「見守りネットワーク」があるのを和田山町の方が見つ

けて、これに学んで、町の福祉課と在宅介護支援センターで「ケア会議」というをつくった。平成15年から、新聞や郵便が2日以上たまと在宅介護支援センターに連絡が行って、そこから地域の民生委員とか福祉委員に連絡して安否確認をする。連絡がつかないときは在宅介護支援センターの職員が行く。緊急の場合は救急車を呼ぶ。新聞販売業者はそれぞれ月1回ずつくらいミーティングをする。

そういうようなことをやって、私も大変いいと思ったのですが、できればこれをもうちょっと詳しく調べたいなと思って調べてみましたところ、和田山町というのは平成15年で人口1万7,000人（高齢化率24%）くらいだったのですが、合併して朝来市（あさぎし）になってこの事業は消滅した、そういう話でした。

（スライド）朝来市というのは3万4,700人（高齢化率28%）ですから、和田山町にとっては倍ちょっとになっただけなのですが、消滅してしまったというお返事をいただきまして、現在は緊急通報システムだけ配って、緊急時にボタンを押すことによって対応していると。そういうお話だったので、この素敵な絵はパンフレットに出ているのですけれども、なかなかこのようには行っていないというのがわかりました。

（スライド8ページ上段）これは、こういう見守りネットワークというのを、中途半端にしか知らないので恐縮なのですが、お話ししようと思って幾つか出してみました。松戸市常盤平というのは、孤独死防止対策のきれいなパンフレットを出していて、大変熱心に取り組まれているのがわかります。

常盤平団地は1万6,000人くらいで、昭和35年か37年に誕生した団地で、平成11年に、死後3年を経た男性が発見されたというショッキングな事態があって、それから本格的にいろいろなことを始めたのですが、平成14年には6件の孤独死がやはり発見された。高齢者ばかりではなくて、不況による中高年の自死なども含めてそういう数なんだそうですが、自治会が解決に立ち上がろうとして、現在、一応システムができています。

（スライド9ページ上段）これは松戸市全体で、常盤平団地ではないです。

常盤平団地のほうが少し若いと思うのですが、松戸市全体の人口構成で、高齢者が増えているのがわかります。

（スライド9ページ下段）これも高齢化率の変化と後期高齢者の率で、平成17年時16.3%ですけれども、だんだん急に上がっていつているのがわかると思います。

（スライド10ページ上段）これは、1人暮らし世帯がやはり増えているというデータです。

（スライド10ページ下段）松戸の取り組みは年を追っているいろいろなやってきていて、初めは「孤独死110番」ということをやって、それから団地の自治会が立ち上がり、シンポジウムをやり、新聞販売店と協定を結ぶとか、鍵業者と協定を結ぶとか、そういうこともいろいろやって、現在、この図のような格好にできていると言っているらしいです。

左側が緊急時の通報ネットワークで、右側が通常時の通報ネットワークです。左のほうが、棟ごとの連絡員とか、市政協力委員とか、代議員とかいう自治会の人たちがかなり入ってきて緊急に対応しようとしている。右のほうは、もう少し一般的な人たちだけでやっているという感じになりますが、緊急が起きたらすぐ、パーッとネットワークが作動して、発見することにしなければならないにしても、死後3年などということのないようにしようということをやっています。

ごく最近、私の友人のお医者さんが松戸で診療所をやっているのですが、この人のところへ実験的システムを入れた。このお医者さんは、朝、患者に全部電話をしていたらしいんですね。しょっちゅう通ってくる自分の患者さんとして100人ぐらいいて、それを看護婦さんが電話をかけて、「元気ですか？」とたずね、「大丈夫です」と言ったら、「じゃあまたね」という感じでやっていたらしいのですが、お話し出すと、「うちの孫が昨日来て」とか、どんどんそういう話になって、時間がとても足りないというので悲鳴を上げて、最近、システムを入れたと。

朝、お医者さんがボタンを押すと、向こう側の、電話機で受け、そのお医者さんの声で、「今日は元気ですか」と。「元気だったら1番」「ちょっと調子悪

ければ2番」「緊急を要する人は3番」というふうに言うと、向こうで押してください。それが一挙に表示されるわけです。

その表示で、1番の元気な人は全然相手にしなくていいというあたりで、かなり効率化しようという実験システムも少し始まっていて、松戸は定盤平団地を中心に熱心にやっている。まあ、行方はよくわかりませんが、熱心に行っているというのがわかります。

(スライド11ページ上段)これは多摩ニュータウンです。開発のときのパンフレットですが、時期も違いますし、どんどんいろいろな開発が行われている。昭和46年に諏訪・永山地区というところで第1期の入居、まち開きがあった。ここが一番年取っているわけです。多摩は、団塊の世代が大量に入居して、初めはもちろん若かったわけですが、だんだん高齢化してくる。そして、子供たちは団地から出るとなかなか戻ってこないというあたりで、少しずつ危機感が広まって、いま多摩ニュータウンも、団地再生とかいろいろな言葉で言いますが、いろいろな形のネットワークをつくらうとしています。

(スライド11ページ下段)これは、さっきの松戸に対応したデータで、「多摩ニュータウンの場合」というのは、お配りした資料のほうにもこう書いてあるのですが、このデータは多摩市のデータです。多摩市の7割ぐらいがニュータウンに住んでいるのですが、ニュータウン以外の人も入っています。稲城とか町田市とか、ちょっとずつ入っていますので、これは多摩ニュータウンそのものではないのですが、どんどん高齢化していると。

(スライド12ページ上段)これも高齢化率の推移で、平成17年段階ではまだ若いということがわかります。

(スライド12ページ下段)世帯構成が、やはり単独世帯と夫婦のみが急速に増えているのがわかります。

(スライド)これはちょっと古いデータかもしれませんが、多摩ニュータウンが入居したときの世代構成です。一番右は平成7年で結構古いのですが、ほかの東京と比べて、最初のときは非常にいびつな年齢構成ですが、あっという間にまん丸くなってきたというのがわかるのではないかと思います。ちょっと

グラフが汚くてすみません。

(スライド) 下の棒グラフは、世帯主の年齢と平均した年齢。入居したときは39.4歳だったのが、51.1歳になったとか、その後どうなったか。左側が賃貸で右側が分譲の場合です。入居したとき38.9歳だったのが、平成7年には49.6歳になった。高齢化していているというグラフですが、ニュータウンの高齢化の問題というのは、一定期間に大量の住宅供給をして、かつ、住宅のタイプが限られていますから、特定期間に年齢層の近い居住者が大量に入居するところとかなり問題がある。高齢者は、だんだん増えるというのではなくて、階段状にバンパーンと跳ね上がってくるというところが一番の違いではあると思います。

(スライド) 左側の、高齢者の「高齢期の生活に対する考え方」というのを、多摩ニュータウンで既存調査から拾ってみますと、「近隣を大事にしよう」とか、「身辺は自分でやりたい」とか、「子供には頼らない」とか、「助け合いが必要だ」とか、左の折れ線みたいなグラフの高いところにはそういうものが並んでいまして、結構自立して生きたいというのがはっきりわかると思います。

右側の何かワケのわからないダイアグラムは、我々が書いたのですが、いろいろ関連する団体とか組織が多摩ニュータウンにはあって、それがどういうことをしていったら先行きうまく行くかというのを考えたのですが、このときはあまりうまくいっていません。

(スライド13ページ下段)「地域活動の現状と希望」という小さな棒グラフです。いまやっていることと、将来やりたいこと。「環境活動をやりたい」というのが多くなっていますね。

右側は、諏訪・永山を、我々が何をしていったらいいかという調査の中で提案したことです。5つ提案を出していて こんなこと、いま、とてもできていないのですけれども、右上は、多摩ニュータウンの道路を、車椅子でも行ける道路をどこかにつくろうと。多摩ニュータウンというのは、つくったとき、起伏を生かした良い計画なんですけれども、高齢者にとっては大変だということがわかってきて、どこか一本でもそういう道をつくらなければいけないという

のが右上です。

それから、空き店舗を利用してこういうことをやったらいいのではないかと  
いうのがほかのマルで、一つは、車椅子の修理工場をつくって高齢者がそこで  
働こうと。その下は、子供を預かってやるサービスと、高齢者を預かる、託  
老・託児サービスというのを一緒に空き店舗でやったらどうかとか、一番下は、  
寄り合いみたいなのがやはり必要ではないか。左上は、高齢者で仕事をしたい  
人もいるから、何かそういう場所をつくろうと。空き店舗の利用形態提案とい  
うのを、我々の会社で何かやったときの話だったと思います。

(スライド)これは、さっきのわかりにくかったマルの中の1つ、NPOと  
いうのが幾つも活躍してしまして、これは「福祉亭」というNPOで、左側に  
書いた食事サービス、クラブ活動、生き生き事業。「まめふく事業」というの  
は、子供の預かりみたいなものです。子供の料理教室なんかもやっています。  
それから国際交流。

これだけの事業をこのNPOは本当に献身的なサービスでやっていて、下に  
囲碁をしている写真がありますけれども、高齢者の寄り合い所になってきて、  
非常に頼りにされているところです。永山4丁目というところにあるのですが、  
交流の場を提供して、生活を支援して、地域情報を出して、世帯間交流をしよ  
うと。高齢者の社会参加の拡大を図って、元気な人にはずっと元気でいてもら  
って、体の弱った人たちもできるだけ参加の機会を増やそうということで、昼  
食サービスもしています。これは空き店舗を利用しているのですが、現在、コ  
ーポラティブで「永山ハウス」というのが設計されていて、その一角にこれも  
入ることになったと聞いています。

なかなか問題も多くて、ヒアリングしますと、来る人は来るけれども、来な  
い人は何をやっても来ないとか、一度来るとあまり長い間いるので、ほかの人  
が利用できないとか、矛盾するような悩みがかなりある。だけど、高齢者には  
居場所が必要、絶対それは大事なことなんだというふうに言っています。

(スライド14ページ上段)実は、私は府中に住んでいるのですが、府中市は  
どうなっているかなあと思って、高齢者見守りシステムというのをHPから見

てみました。そうしたら、府中市はなんと「“危機去れ”システム」というのをつくって、「危機、去れ」と言っているのですが、きざし、気づき、さりげない見守り、連絡（相談）という4つの言葉をつくって、平成17年4月から、高齢者在宅介護支援センター（市内に11カ所あります）を拠点にこういうことを展開している。行政サービスです。こういうことをやっているのだということがわかりました。

（スライド14ページ下段）「危機去れ」システムのネットワークのつくり方です。見守りネットワークでコーディネートしているのかとか、わかりにくいところがあります。これだけ見るとちょっとばらばらに見えますけれども、在宅介護支援センターが核になってやっているのだと思います。

（スライド）こういうことに気づいたらやってください、というふうに広報しています。洗濯物の干しっぱなしとか、新聞がたまったりとか、買い物に来ない、窓が閉まった。わが家など窓が閉まっていますけど……、こういう感じのネットワークで広報しています。

（スライド15ページ上段）「おわりに」というところで、先ほどの新潟県長岡市小国町法末集落（小国町も長岡市に入りましたから、長岡市法末集落と言った方がいいのかもしれませんが）のことを、最後にちょっとだけお話ししたいと思います。

人口は減りつつあり、一時、500人ぐらいいたときがあるというふうに聞きますけれども、小学校はもう閉鎖されてしまっておりませんし、世帯数すらどんどん減っていているという感じです。人口は激減しています。

右上の写真は、我々がここに活動拠点を、普通のおうち、空き家になっているところをちょっと借りたんですね。その場所開きをしたときに集落の方をお招きして、午後のお茶の時間帯にいろいろなお菓子などを焼いて、「新しくここに我々も家を借りましたので、見に来てください」というふうなお触れを出して、来ていただいたときの写真です。

（スライド）これは、その集落のご説明で、中越地震が2004年でしたけれども、そのときから我々とのお付き合いが始まったものです。

(スライド)ごく初期には、普通の家を借りないで、集落センターというところをお借りしたんですね。これは雪をかくブルドーザーが入った車庫の上に広間があるので、そこをお借りしていたのですが、1年借りて、「1年感謝祭」というのが左の写真です。これも集落の方が写ってしまっていて、ネクタイを締めた方は、長岡市の催しに出てネクタイを何年ぶりかでした、と言っていましたけれども、この方が70歳ちょっとぐらいです。

(スライド)これは、我々がそこの集落の交流事業としてお茶会をしているのですが、そのときの写真です。

(スライド)こういうきれいなところで、私たちは田んぼを使わせてもらって、都市計画家協会の仲間でおコメもつくっています。左側は全部我々の仲間、米も3俵くらいはとっています。集落の方たちはほとんど農業で、勤め人も少しいますけれども(下の小国町まで下りていくんです)、ほとんどの方が田んぼや畑を持っていて、田んぼはメインの産業です。

(スライド15ページ下段)雪が降ったときの写真ですけれども、山ですので、雪が降ると本当にどうしようもない。隣の家に行くのも大変だという感じになるのですが、玄関から出てきたこの人と、向こう向きに歩いている人は同じ人です。この方も70半ばの方ですが、新聞配達とお買い物を引き受けている方で、普段はスクーターでやっているのですが、雪だとスクーターが使えないので、この日は彼はこうやって歩いて来た。集落といっても軒を並べて家が建っていませんで、ポツン、ポツン、ポツンという感じなので大変だと思います。

どうやって雪に備えるかというのも、我々も非常に心配だし、雪おろしというのも、彼らはまだ自分たちでやるのですが、なかなか大変です。冬だけみんな一緒に住む家を決めようかという話もときどき持ち出すのですが、「とんでもない、そんなことは嫌だ」というふうに言われていて、皆さん孤立して住んでいらっしゃるという感じになっています。

(スライド16ページ上段)越後中門造りと称しているのですが、こういう伝統的な民家がたくさんあります。先ほど集落センターという安普請が出てきましたが、ああいうのとは違った、継ぎ接ぎだらけなんですけれども、非常に風

格のある、美しい外形のある家が幾つかまとまって残っている、きれいな集落です。

(スライド)我々は支援を始めた2005年の初めぐらいから、毎週末は必ず誰かが行こうということになっていまして、土日・土日というのを詰めながら行っているのですが、だんだん都市計画家協会の我々だけでもやり切れなくなって、都市と集落を何かでつなごうという事業を盛んに考えています。

(スライド16ページ下段)これは、そのモニターツアーをやったときに幾つかのお庭に入らせていただいて、野菜の説明とか、お花の説明とか、皆さん大変喜んで、面白かったと言ったのですが、右の人はツアーに参加した都会の人で、左の方がこのお庭の持ち主です。かなりおばあさんなんですけれども、私は、あの説明している写真を撮ってみて、手を見たら、本当に高齢の方には、自分の居場所というのと、生きがいというか、生きる目的みたいなものがあることがどんなにいいのかなというのが、非常によくわかりまして、「あの手の力の入り方を見てください」というつもりで、これをお出ししました。

大変雑なお話を、恐縮でした。お聞き苦しいところが多々あったと思います。

A どうもありがとうございました。

各地域の実例も交えて詳しいお話をいただいたわけですが、これから1時間足らずの時間がございますので、ご出席の委員の方から、ご質問なりご意見をちょうだいできればありがたいと思います。

B 法末の見守りネットワークの場合、この人口構成からして、子供さんもいらっしやらないということを考えたとき、いずれ消滅するという、その先のどのような計画をお持ちになっていらっしやいますか。

講師 それは、支援している仲間の中でもさまざま議論があります。まずは、絶対消滅するのだから、集落の「しまい方」というのをきっちり議論すべきだというのがあります。議論すべきだと言われているのですけれども、どう

したらいいかよくわからないで、いま、議論が煮詰まっていく方向には進んでいません。

もう一つは、悪あがきしている間に、集落から出た子供たちというのは、小国町とか、長岡市とか、もちろん東京にもいますし遠くにもいるのですが、近くに住んでいる人もいるのだから、そういう人たちが戻ってこないとも限らないではないか、と。畑はあるし、小千谷あたりに出た人はまだ畑だけに通っているわけです。そういう人たちもいるのだから、そんなに「しまう」ことだけ考えなくてもいいのではないかというのが2番目です。

3番目は、一番展望がないのですが、私などはわりとその口で、一人でも住み続けたいという人がいる限り、何か一緒にやっついていかないといけないのではないか。何か絶望論みたいな感じですけども、そういうことで、先はどういう展望になるのかというところに全く行っていません。

**B** 医療はどうしておられるのですか。

**講師** 小国町に診療所がありますので、そこへ行く人と……。

**B** どのくらいの時間ですか。

**講師** 自動車で行けば20分くらいでしょうか。小千谷に出れば、40分くらいで総合病院があります。いま、私たちが一番やろうとしているのは、今年は救急救命のことでちょっと予算がついていて、復興基金のおカネか何かがあるのちょっとあるので、それを使って、さっきの常盤平の何とかシステムではないですが、ああいうやり取りを、小国の診療所か何かと結んでやれる方法を考えたいなあというのが今年の課題です。

**B** 逆に長岡市なりというところで、その受け皿をつくろうという話は全くないのですか。

講師 全くないと思います。

A 先ほど、和田山で町村合併になったらせっかくのネットワークがつぶれてしまったという話がございましたね。町村合併というのは「平成の大合併」で至るところでやっているわけですがけれども、そういう予想外の、コミュニティをダメにしてしまう動きというのはあるのでしょうか。

B 和田山の場合には、「巡回員」というのを市でつくろうというので、和田山町、朝来のほうでやってはいますが、できていたといっても、徳島と並んで廃村の盛んなところで、もともと森林の地域なのです。森林の地域というのは、前にもお話ししたように、分家、分家で、江戸時代に山へ、山へ上って行って、そして藩からは出られませんから、分家のところで田んぼをつくり何をやりと、やったけれども、林業が全く成り立たなくなったものですから、もう捨てられた町なんですね。これがあちこち点在している。何とか狙いは、朝来などがやり方を考えているのは、受け皿の住居をつくって、そこに集めたいという思いでいることは事実です。

A 集落移転？

B そうです。こちらもそうですが、後がまがないものですから、家族の出ていった人は、おばあちゃんいらっしゃいと言うけれど、受け皿のほうははっきり言って余人がいなくなってしまうので、市として何かできないかという提案は随分始まってきてはいると思います。

ただ、現実には受け皿をつくってあげられていないので、一番いいのは、病院の近くに住宅をつくって、そこに集団でお住まいになるなら、ある程度、人的つながりができますけれども、全くできなくなる。最後は、40代で何人が残っている方がどこまで固執されるか、にかかっていると思います。

C 政府が言っている「限界集落」の話で、法末は200世帯で平均年齢は確か71歳。実は私も法末に行く前は、子供の家に引き取ってもらったらどうかとか、集団移住してそこは閉鎖したらどうか、というふうに思っていたわけです。実際に法末へ行ったら考え方が変わって、1人でも残っていたらやはり何とかしよう、というふうになったんです。現地に行くとそうなりますね。

B なります。なるんだけど、僕は仕事の関係もあってしょっちゅう徳島へ行きますが、徳島が一番激しいんですね。成功した葉っぱビジネスのあそこの例が1つあるものだから、必死になってあれにこだわっているけれども、結局、時間の問題で、次々となくなる。なくなった後は本当にひどい状態で棄村されているわけです。

いま言われたように、元気な人は、20分くらいであればそこから働きに行けるんですね。まあ、雪の問題があってそちらは難しいのかもしれない。徳島は行けるものですから、本当はその受け皿を予算があればやってあげられれば。ばらばらにして、家族に引き取れというのは無理だと思うけれども、町ごと「何とか村」というのを近くに団地をつくって住まわせてあげるというほうが……、どこかでギブアップする人の最後というのは、みんな悲惨な状態なんです。

A 先ほど「地域力」のところでお話があったけれども、大都市、農村を問わず、サラリーマン、自営業者を問わず、人との付き合いというのはだんだん減っていく。顕著に減っていくと申したらよろしいですかね。その辺は一体どういうふうに考えたらいいですか。「1人でも残ったら」という話と、どうくつつくのでしょうか。

B そんなところをいくらやろうといっても、限界集落というのはそれこそ何千とあるわけです。それを一つひとつ、みんな分担するわけにいかないんですよ。

A 標高700メートルくらいにあるところはみんな限界集落になっているわけですからね、日本じゅうで。

C できたコメを少しあげて、賃借料を払うという形にしなければいけない。日本では、田んぼというのは貸したり売ったりできないということですからね。

講師 そうです。法末の近くにもう一つ、被災集落の山野田というのがあります。私は行ったことがないのですが、山野田というのは家がもともと9軒だったのです。都会の方が別荘にしている人がいて、それも含めて9軒だったそうですけれども、地震で全壊して、どこかに移るところをいま造っている。一生懸命、集落の掃除をしたりしながら建設をしている、というふうに聞きました。ちょっと詳しくないのであれですが。

A 農地の所有権というのはどういうことになっているのですか。人が死んでも所有権は残ってしまいますか。相続人のところに行くのでしょうか。

B 残るでしょう。

講師 そうでしょうね。

A 最終的には土地の所有権が残っている限りは。

講師 ええ。まあ、子供がいない人というのもしいるかもしれませんが、どこかへ移っていて。

B 農協みたいなものがあれば、農業生産法人が購入することはできるようになったのでしょうか。

A 農転といっても、だまっけていても転換してしまうんですね。

C 私、小国町でタクシーに乗って法末に行こうとして、聞いたら、法末の人たちは皆さん、タクシーに乗ってお医者さんに行ったり、薬を買いに行ったりするんです。それなりにおカネがあって、とにかく月に1回、タクシーに来てもらって、お医者さんに行って薬を買って戻ってくる。これが毎月の日課だし、これを楽しみにしておられるんですね。だから、タクシーの運転手は結構忙しいわけです。全部、予約表があってね（笑）。

D 病院そのものも情報交換の部屋みたいなもので、年配の方があそこでお話をしておられますよね。

A 高齢化してしまって、活動が停止したような集落（限界集落）というのが日本じゅうに多いですね。そういうところの経済の出入りというのはどうなっていますか。収入がないわけでしょう。年金は、国民年金とか多少はあるけど、1人6万か何かでしょう。どうなっているんでしょうね。

**講師** 結構自活しているから、いまのところ、食べ物には困らないですね。そういう意味では、あまりおカネが動いているとは……。

A そういうところの地域収支を、何かケーススタディでやったのがありますでしょうか。あると、これからの議論に非常にいいと思うのですが。

**講師** 振興組合というのがあって、9軒参加していると言ったかな。それで、小学校の廃校になったところを使って交流宿泊施設というのをつくっています。そこで働く人たちは、毎日来たりはしないから、例えば、私たちが「3人で行きたい」とか言うと、ダメと断られてしまう。ある程度まとまって来てくれないといけないけれども、多過ぎても断られる。適当に来てくれるならと

でも歓迎されて、1泊2食6,000円ぐらいで泊めて、山菜料理がすごくおいしいんです。おコメはものすごくおいしいので、私たちは「ちゃんと山菜レストランをしよう」とか言うんですけど、もう70代半ばになって、新たにそういう苦勞を背負い込むというふうにはいかないですね。

C 魚沼のそばに、日本有数のおコメのおいしいところがありますね。

講師 本当におコメはすごくおいしくて。

A 北魚沼郡というのは、日本で一番うまいコメができるそうですね。

C そういう限界集落的なところと、大都市の「都市の孤独」というのが、現象は同じなんだけど、両極端ですよ。

講師 そうですね。

C 大都市のほうは、見守りはいいけれども、逆に、「見守り以上のことをしてくれるな」という人もいるわけだろうし、例えば、法末だと200世帯ですから。

講師 いま、43世帯です。

C そうすると、一応、悉皆的にわかるわけですね。

講師 はい。

C 大都市になると、どこにどういう人がいるかわからない。そのターゲットをどうするかというのは非常に難しいですね。

**講師** 多摩ニュータウンも、きっと、少し変わっていくような気がしますね、そういうかたまり方が。

**C** 一番問題になっているのは高島平ですね。

**A** 団地じゃなくて、ポコッと建つ30階ぐらいのマンションというのは、みんな2DK、2LDKなわけですが、これを分譲しますね。ところが、おじいさんが一人で住んでいると思ったら、何日も新聞が滞って死んでいたと。そういうバラバラとした、自分の家で一人で死んでいくというのが出てきているわけですね。いまに、もっとどんどん出てくると思うんです。浜町とかああいうところに、わりと安い高層マンションがあるでしょう。それは防ぎようがない。

団地だと、まだ同じような境遇の人がいるけれども、隣が何をしているかわからないというのは、都市の孤独で、そもそもわからないでしょう。お互いにわかろうとしない人たちがいるところのほうが、むしろ多いと思うんです、街の真ん中は。おまけに、そういうところの人はプライバシー意識が強くて、「かまってくれるな」とか、「なぜそんなお節介をするんだ」という話になるでしょう。なかなか根本的な対策は難しいと思うし、そういうのを突破しようと思うと「地域力」の話になるのですが、地域のつき合いはどんどん落ちていってしまう。こういうことですよね。

**D** 地域社会のつき合いではなくて、お孫さんとかそういう家族の親戚づき合いで、孤独死ではないけれども、全国的に散らばった家族が時々おじいさんのところに行くとか、そういう家族連帯性というものはあるんじゃないでしょうか。

**講師** ええ。家族というのは、どんな場合でも頼りにはしていると思いますが。

E 都会でそういうものが成り立つかどうか、ということですね。地方の集落は、例えばお参りしなくてもお墓もみんな向こうにありますから、何かそういうことが……。

D お墓参りがあるから。

C 例えばドイツの場合は、地区計画があって、意外とコミュニティというのはしっかりしているんですね。アメリカなんかも、結局、教会ですね。彼はなぜ（教会に）来ないのか？ という話になる。日本の場合、どうしてお寺がそういう場にならないのかなと思うんですけどね。

講師 そうですね。教会は核になりますね。

A 「下改め」でもやらないと復活しないですね。徳川時代のお寺というのは、下改めがあったから戸籍を持っていたわけです。いま、「宗教を紐帯にして」ということは考えられないんじゃないですかね。

F ちょっと話は変わりますが、先ほど多摩ニュータウンのお話をされました。そういった新住法のニュータウンの優等生が大阪の千里ニュータウンですね。そこは一度にまちができて、住まいばかりだったので、ある意味では問題が顕在化した。ところが、多摩ニュータウンのほうは優等生ではなかったので、全部売り切れないがために、いろいろな世代、あるいは業務とかいろいろ入ってきて、そういう意味ではまちの問題があまり表面化しなくて済んだ。表面化しないというか、いろいろな要因でまちの……。

講師 そうですね、長い年月の間に。

F もう一つ、お伺いしたいのは、多摩ニュータウンの場合の資料を見さ

せていただきますと、単独世帯が昭和60年の18.2%から平成17年（35.7%）と、増えています。これは、データのとり方でそういうことが可能かどうか知りたいのですが、この単独世帯は（もちろん1人でしょうけれども）、高齢者なのか普通なのか、そのマトリックスでわかればありがたい。

というのは、たまたま別のところの勉強会で、ニューヨークのマンハッタンは50%が単独世帯だという話があって、本当にそうかなと思ったら、マンハッタンは世帯の半分が単独なんです。ただ、全部高齢なのか、あるいは海外から転入、移住した人たちも含めて単独なのか、そこはちょっとわかりませんが、この場合も、増えてきたのがどういう世帯なのか。高齢者なのか等々がわかると、非常にありがたいなと。

**講師** そうですね。これでは……。

F それはちょっと我々も勉強しなければいけないのですが、多摩ニュータウンのいろいろな特徴からすると、意外と交通の便もいいので、永山とか多摩ニュータウンに近いところの駅前には、1人用のアパートみたいなものがあるのかもしれないし。

E 大学の進出が、ちょうど平成7年以降に集中していますからね。

F ええ。

**講師** 「多摩ニュータウンの場合」と書いてあるのが、まずいけなくて、多摩市のデータなんですけれども、確かにおっしゃるように、単独世帯イコール高齢者だと考えてはいけないと思いますし、人口コーホートなんかを、「多摩ニュータウン・まちづくり専門家会議」というNPOが結構出しているんですね。細かいのを出しているので、分析すれば、きっといまおっしゃったようなことがわかるとは思います。申し訳ありませんが、今日は全くそんな用意が

なくて、ちょっとわかりません。

結構抜けていって高齢化したという説と、いや、それほどでもないんだ、というのはあるんですけど、でも、諏訪・永山というのは一番古くからあって、かなり高齢化が進んだところだとは思いますが。

A 先ほど、空き店舗を活用した地域の集まりというお話がございましたね。空き店舗というのは、事業が減ったから空き店舗になってしまったのですか。

講師 そうです。きっと、すごく衰退した、かなりボロボロになったままのものを……。

E ただ、地方の中都市はみんな、中心市街地というか、そこは空き店舗がどんどん増えているでしょう。それを利用しようという動きは、パラパラ出始めていますよね。

講師 先ほどの多摩の医療介護システムのお話も、空き店舗に「多摩ニュータウン・まちづくり専門家会議」の秋元（孝夫）さんという人が入って、まあ、建築屋さんですから、設計事務所もそこでやるという話になって、いま、学生さんたちと一緒にいろいろなことをやり出しています。

A 小売り商店なんか見ると、どんどん減っているでしょう。それは空き店舗になっているのかもしれませんがね。

講師 近くにアウトレットが幾つもできましたし、小さなお買い物をする人たちというのは減ってしまったかもしれませんね。

A 大沢の大きなアウトレットにとられてしまった、とかいうことはある

でしょうね。いや、そんなに空き店舗があるなら、うまくそれを使ってコミュニティの拠点にできないものか、という気がするわけです。情報を拠点にしたり、助けに行く場合の拠点にしたり。それと行政がくっつけば、ある程度まで行けるように思うんですね。

**G** ちなみに、13ページでご提案なさった寄り合いですとか、それから空き店舗もあるわけですから、何となく実現しそうな気もするのですが、どういうことでダメになったのですか。

**講師** いえ、これは、現実にこういうことを事業としてやっていくという話ではなくて、調査の中で提案しているだけです。これは随分古いのですが、さっきの秋元さんたち、とかいうのが空き店舗に入っているということは、こういう形の一つの実現ではありますね。もう十年もたっているんですけど、このときにやれたわけじゃないんです。

**G** やはり団地単位ぐらいですか、画像で出てきていた空き店舗にNPOが入って、老人の集まり場所とか食事場所みたいなものをつくるというのは。

**講師** 諏訪・永山で1つとか、それぞれ商店街がありますよね。

**G** ひとかたまりの団地の商店街になるような単位で考えていってもいい、というぐらいのサイズですか。

**講師** そうだと思います。

**F** それと、個人的な経験といいますか、家内の親（お母さん）が亡くなって、男ひとりになると、調理の仕方、何をやればいいのか全くわからない。スーパーに行ってもモノを売るだけだと。

ところが、そこは、商店街は衰退しているのですが、かろうじて八百屋とか魚屋があって、そこに行って教えてもらう。90歳近いおじいちゃんもそこに行って勉強して、生活を自立しているという話を聞いて、商店街が、地域の賑わいだけではなくて、1人暮らしの人たちのいわば生活支援者ではないかという感を新たにして、その分の付加価値も含めて、ぜひ商店街を応援してほしい。

現実には、多摩ニュータウンは、いま、改めてそういう視点で見ると、安いのは南大沢のスーパーとかアウトレットかもしれないけれども、一人ひとりの生活の支援をするサービスも含めて、地元の個々の商店街というか、「個店」を、おカネなのか何かわかりませんが、背中を押して上げるというのではありませんか。

**講師** 地元の商店街というのは、高齢者にとっては命綱だと思うんですね。大きなスーパーが道路沿いにできても、絶対面倒を見きれないものがそこにあると思います。

**A** 第一、後期高齢者になって杖が要るような人というのは、大きなスーパーではモノを買えないでしょう。だから、近隣商店というのが非常に重要になってくるけれども、近隣商店の機能というのは現実にはレベルが下がっているんですね。下がっちゃいけないと思いますが、下がっているでしょう。

**講師** そうかもしれません。なかなかね。

**A** 昔ながらの商店街というのは、大体、じじばばストア。お客もじじばばですね。私は、目黒の油面のところを毎日通ってくるのですが、10時頃通ると、ほとんどガラーンとしていますよ。店も人通りもない。まちぐるみで高齢化してしまったんですね。そういうところがいっぱいあると思います、在来の都内の市街地でも。

C 先ほど見守りとおっしゃいましたが、本当はもう一歩進んで、みんなで地域のコミュニティをつくっていくというのが必要なんでしょうね。見守りというより、望ましいのは、地域のコミュニティが……。でも、しょうがないんでしょうね。「せめて見守る」と。孤独死をなくす、困ったところの御用を聞くという形で、せめて見守りぐらいの体制を日本でつくるべきだということでしょうね。本当はもう一歩進んで、みんなでコミュニティをつくっていくという形が必要でしょうね。

B でも、一緒に生活する若い人がいないと、やっぱりできないんですね。都合のいいときだけ来たのでは、本当に困ったときにいないわけだから。

本当はある程度の集落を - - 要するに、長岡市法末という中心街に、ちゃんとエレベーターのついたマンションをつくってさしあげるべきだと思います。たまたま、こちらがいらっしゃるからそこは続いているけれども、ほかの似たところが山ほど見捨てられたまま、消えていっているのも事実なんですね。

だから、財源をこっちに向けますと言って増税したほうがよっぽど田舎の人には受けますよ。それをわざわざ農村に、農業をやっていたら1戸あたり幾ら補助すると。あんなの幾らもらっても、しょせん、生きつないでいるだけですよ。治療にならない。

講師 アメリカの文献を見ると、「community sentiment」があるのをコミュニティと言うと。そうすると、そういうのが崩れたときに、「いまみたいにつき合わなくてもいい」とか、「そんなの知らない」というふうになってきたり、それから、超高層の中にいきなり何百戸とできて、隣人は全く知らない。そういう事態のときに、community sentimentなるものを何で構築するのか。みんな一緒にいればコミュニティかということ、そうではないでしょうし、何ををもってcommunity sentimentにするのかというのは、すごくわからなくて……。

地震とか、被災したとか、そういう外圧に対して頑張って耐えなければならぬというのはわりと核になって、例えば山古志の場合とか、法末の人たちも

被災のときは全村避難だったんです。やることないから、昼は、道路が破壊されたのをちょっとかいくぐって家の修理なんかして、でも、そんなに一日じゅうやれないから、みんなで一緒にいると、「すっごく楽しかった」と言ってるんですね。「あんなにたくさんみんなと話したことがない、とても楽しかった」と言っていて、そういう外圧みたいものでやるのかなあという気もするんですけど、高齢化に立ち向かうというのも、コミュニティ再建の何かになるかもしれないですね。見守るだけではないところへ踏み出せば、それはすごくいいと思うんです。

C ヨーロッパなんかへ行くと、人間生活のベースはコミュニティ。要するに、人と話したり食ったりするというコミュニティがなければ、人間として生きている楽しみもないと。日本はどうも、コミュニティというものを忘れてしまったのではないか。

D 大学院生で、物語を書くNPOのグループがいて、老人ホームなどに行って、その人たちの若いときの話を1時間でも聞く。

**講師** ああ、私も何かでちょっと見ました。

D そうすると、ご老人のほうも非常に満足して、片一方は、歴史の資料を収集して後で本にするとか、出版物にするとか、そういった形だと話すほうも熱心に話してくれるようですね。

A いま、自分史というのが流行っているのはそういうことですかね。自分史の普及。

D 結構いい本屋さんがついて、ちゃんと出してくれるときもあるようですね。

C ヨーロッパなんかに行くと、年寄りが自信を持って、また、社会がその年寄りを尊敬するといいますが、例えば共産主義から自由主義に変わったときに、年寄りの人たちが命を張ってやってきた。そういう人たちを社会が尊敬して話を聞いたりする。年寄りに対する尊敬、尊厳の念がベースにあるような感じがしますね。日本はいつ頃からか、年寄りに対して……、法末で畑を耕している人たちも、本当は、社会みんなが尊厳の念を持って見る必要があるわけですね。

D いまの日本史の教育にも問題があるんです。現代史を全部教えませんからね。

E 私の記憶でも、東京でも地方でもそうですけれども、大部分は主人が戦争にとられて、なおかつ、その地域の中に隣組という社会が非常に強い形であって、統制されていたような仕組みがあった。あれが意外に根強く反発があるのではないかと思います。

もちろん、教会とか何とか、宗教や何かの核があってされるという意味ではなくて、世の中の普通の統治のルールというか、階級なりそういう慣習とは別に、一時的にああいうものが急遽つくられて、それによって、何かあれば引っ込みがつかない。それから、供出という問題があった。それが随分深いのではないかと考えているんです。

C さっきのお話で和田山が出ましたけれども、神戸の震災をきっかけとして、兵庫県全体で地域のコミュニティが必要だという話になってきて、法人税の超過課税分で110億円おカネをつくって、兵庫県が、全部の小中学校区単位に1,300万ずつ出して、地域のコミュニティをつくるということを始めたんですね。小中学校区単位ですから、もとに戻っていて、私は、これがいいのかどうかと知っているんです。

神戸、特に但馬なんかに行くと、いまだに区長というのがいるんです。その

区長が中心になって、公民館を中心として小学校区単位でもう一遍コミュニティをつくらうと。そこに対して県が1,300万ずつ出していくわけです。これが、強制された、上からの、なんかもとに戻ったようなコミュニティなのではないかという感じもちょっとするんですね。

E 文化的に育つというような土壌をどうやったら生み出せるか、というところが一番大きいと思うんです。

A 自分たちがカネを出して小学校をつくりますとか、300年かかってこれだけ立派な教会をつくりました、という社会じゃないんですね、日本は。そういうものがあって初めて、地域のつながりというのはできると思うのです。みんなで汗かいて同じものをつくりましたと。そうになると、家族でおしまいですからね。まあ、家族というのもうっとうしいものではあったんでしょうね、昭和20年にあつという間になくなってしまったから。

昔は、戸籍というのは家で作ったわけでしょう。二男、三男は分家しない限りずっと並んでいた。戸主の統制に服し、ということになっていた。同意が必要だったわけですね。それが制度的にうっとうしい。日本の家族制度は日本に固有のものではなくて、輸入してきたものでしょう。それが定着しなかったのも無理はないけれども、みんながつくったまち、みんなのつくった学校でないという、長い間の……、お上がつくってくれるものだということなんですよ、裏返して言えば。お奉行様がつくってくれる。それで済んできたから、1億円ばらまいてコミュニティができるかという話がまた、真面目に出てきてしまうのだらうと思うんです。

竹下さんだって、あれをつくったときは、コミュニティをつくらうという頭があったわけでしょう。どのくらい歩留ったか、私はそれを知りたいわけなんです。一遍でダメなら何遍でもやってみるか。

D あれの事後調査というのは何かあるんですか。

C あれは使い道自由で、「聞かない」という前提でやっていて、「聞く」というのはやはり介入するということだから、聞いていないのだけど、いまになったら聞いても面白いかもしれません。

講師 もう聞いてもいいですよ。

C みんなで「まちをどうするか」ということを語り合いながら、1年間飲んだという町もあるんですよ。でも、それはいいんです。

講師 いいですよ。善し悪しは別として、何にどう使ったのか、聞きたいですね。

C どうも日本というのは自分の家で死ねない。要するに、病院に行かないと死ねない。自分の家で死ぬ人が病院で死ぬ人よりも超えたのが77年。ちょうどそのときが、在宅で死ぬ人が病院で死ぬ人よりも下回った。自分の家でなかなか死ねない。それから、本当に独りで死んでもらっても社会は困る。非常に厄介ですね。そうすると、みんな見守るしかない。社会のシステムがちょっと外れている感じもしますね。

講師 お一人で地方なんかにはいらっしゃって頑張っている方々は、それなりに皆さん覚悟というか、ポリシーがきっとあるんでしょうけど、生きたり死んだりすることに関して。

ずっと前に、国交省（当時は建設省でしたが）が、高齢社会に関する懇談会だか研究会とかいうのをやっていらして、年取って一人になったらどうするかという話をして、郵便配達の話はその頃もあったんですね、随分前なんですけど。そのときに私が思ったのは、いくら一緒に住んでいても看取れないときはいっぱいあるから、私は、ピンポンと「お元気ですか」という人が来ているなと思えば、安心して外で仕事していただける。だから、「外にいる人のために

やるんじゃないですか？」というふうに思ったんですね。ご当人のため、それを看取らなきゃいけないと思っている人のために、ピンポンがあるのではないかなあと思ったんです。

C ちょっと話がずれますけれども、この9月末、地方財政再建法の基準でレッドカード、イエローカードが出たのですが、あの中で、いま自治体の最大の問題は自治体立病院（市立病院）ですよ。そこだけ別掲で、病院の収支が悪いというのが全部出ているわけです。

いま、銚子がやめたでしょう。銚子の人々の言い分もある面ではもっともで、本当は公立病院というのは県でやるべき話ですよ。銚子市がやって、その周辺の市町村の人たちがみんな来て、銚子市が一身に赤字を背負ったわけでしょう。で、銚子が「やめた」と言ったわけです。そうすると、全国のほかのところも「やめた」と言い出すとなると、自治体の病院というのは全部崩壊していく。

逆に言うと、日本の医療体制をもう一回考えるという形のきっかけになるかもしれないけれども、たしか50くらいの自治体病院で、これはレッドカードだという名前が出ているんです。

E さっきの集落ベースのネットワークの核になる病院というのは、そういう病院ではなくて、むしろ診療所ベースの話でしょう？

**講師** そうですね。

C それで、銚子も診療所に変えようとしたんです。それがなかなか難しく、結局、廃止にした。診療所というと19床以下ですから、みんな診療所に変えたいんですよ。

E それは、長期滞留の病床を減らそうという話から来ているので、目的が全く違うんです。

C 300床なんていうのは大変な病院ですよ。これから、日本の医療体制はガラガラ動いていくんじゃないですか。

F 先ほど限界集落のお話がありました。いま、いろいろやっておられますけれども、農業だけでなく林業支援、実は、京都議定書のCO<sub>2</sub>削減の6%の中の3.8%は森林でいいということで、その森林は、基本的には管理された森林。ということは、間伐とかいろいろやりなさいということなんですね。

それで、前の新聞記事では、ハンガリーから排出量を買うために200億円カネを出すという話があって、同じ200億円だったら、日本の林業の間伐等の振興に使ったほうがいいのではないかという議論もある。そういう林業に対する補助金が、昔は間伐とか私的財産はダメだということも最近はよくなって、進んでいるみたいなんですけれども、何かそういう影響みたいなものはお感じですか。

というのは、それが極端にあらわれたところでは、そういう林業での作業のために、組合で人を採用しようとしたら、結構若い人たちがやって来たと。まあ、幾つかのスポット的な話ですけれども、そういう形で限界集落のほうにおカネが来て、それが地元に着ていけば、若い人が来てくれれば一番いいのですが、そうでなくても、年配の方とか老人の人たちの小遣い稼ぎというか、地元で働く機会になればいいのではないかと思います。

**講師** 少なくとも法末では全然ないですね。まあ、林業と言えるようなものがもともとなかったのかもしれませんが。

C 昔は山持ちというのはすごい金持ちでしたが、いまは山を持っていても、木を切ったって採算が合わないものだから、放ったらかしになっているわけですよ。でも、山持ちなんです。そういう人たちの山林を開放して、そこに例えば都会から - - 無償でその山林を切って、使わせていくという話ができればいいけれども、いま、山を持っている人も困っているんですね。

E 東京都の檜原村でもそうですね。山梨の小菅なんかも全くそうで、若い人はみんないなくなっちゃう。

**講師** 中央区は、檜原村じゃなかったかな、「中央区の森」とかいうのをつくって、NPO支援をしていますね。持っているというよりは、何ヘクタールか決めて、何ヘクタールかを管理する地元のNPOにおカネを出して、看板は「中央区の森」というのを建てているんです。だから、中央区の人もときどきバスで見に来たりするわけです。

F おっしゃるとおり、中央区とか、あるいは港区はどこかとやって、それで区としてのCO<sub>2</sub>削減の目標値を達成すると。それはなかなか面白いアイデアで、23区、区内ではなかなかできませんから、そういったところとタイアップしてやっていく。そして、CO<sub>2</sub>削減だけではなくて、森林の維持とか、森林に行って自然に触れ合う機会をつくったり。

林業もまんざら捨てたものではなくて、たまたまいまは中国なんかの需要が増えて外材も値段が上がってきたので、一時期、競争力がなかった日本の国産材もかなりのところまで来ています。そこをもう少し、環境面で補助金を出してもいいと思いますから、いいところまで来て、それが動き出すと面白いなあと。

G 国産材の流通を考える仕組みというのは、あちこち、材木の名産地ではでき始めていますので、それがもう少し全国一般に広がるといいと思うんです。そうすると、多少は植林も活性化するかなと思いますけどね。

**講師** 法未は屋敷林がすごくきれいなところで、さっきの伝統的な格好の家の周りに、こんな太い杉の木がダーッときれいなんですね。それで、私が最近、一番腹が立っているのは、集落のちょっとメインのところがあるんですけど、そのところをどういうわけか道路拡幅するんです。いまだって4.5メー

ターぐらいあって、滅多に車は通らない。通ろうとすれば、普通の車ならすれ違えなくもないし、ちょっと先まで行けば公民館みたいな広場があって、そこで十分すれ違える。普段何にも通らない、ほとんどすれ違わないというようなところを拡幅する。

この前見たら、赤い印がこんな太い木に全部ついているんです。それで、持ち主の方に聞いてみると、木は、切ってもらおうとすると逆にすごくおカネを取られる。道が広がるのはともかくとして、切ってくれておカネを逆に払ってくれる。それならいいんだと、彼らは思っているわけです。だから、別に道路拡幅反対なんてことは一つも言っていない。

A さて、だいぶ時間もたちました。今日はありがとうございました。  
(了)